

米国オレゴン大学への留学記

森田 司郎 (専修大学法学部教授)

はじめに

筆者は2019(令和元)年度専修大学特別研究員(特例)として2019年4月から翌年3月までの1年間、アメリカ合衆国オレゴン州のオレゴン大学に留学する機会を得た。本稿の目的は、筆者が在外研究員としてオレゴン大学に滞在した経験を綴ることによって、今後在外研究等で海外に滞在される方々にとって多少なりとも有用な情報を提供することである。このためにまず、在外研究の事前準備と現地入りしてからの諸手続きについてできる限り時系列に沿って整理する。次に、筆者の体験を交えながら、オレゴン大学における教育の様子について述べていく。

I. オレゴン大学への留学

1. 滞在先の国、地域、研究機関の選定

筆者は、子どもや地域社会のニーズに対応する学校教育カリキュラムの編成方法に研究関心をもっている。このために、カリキュラム編成に関して各学校現場に大きな裁量を与えられている学校教育システムを有する国の一つである米国は、滞在先の選定を進める早い段階から候補となっていた。世界を俯瞰すれば、各学校に基礎を置く(School-Basedなど)カリキュラム編成を主流とする学校教育システムを有する諸国は北欧をはじめ多く存在する。しかし、今回は筆者に同行する家族(妻と当時4歳と1歳の子ども2人)の状況等を総合的に考慮して、事前にある程度の生活のイメージを持つことができ、出国前の準備を行いやすい(少なくとも当時はそう考えていた)米国を滞在先にすることとした。

米国の国土は広く、地域によってタイムゾーンや気候帯も異なるので、どの地域に滞在するかによって出発前の準備内容も変わってくる。筆者は、現地の学校を訪問調

査することを中心に据えた研究計画を立てていた。そこで、教員養成に中核的な役割を果たす大学が所在する都市に滞在すれば、大学を介することで現地の学校との関係構築がしやすく調査協力を得やすいと考えた。このため、今回の滞在地域の選定に際しては、まずは筆者の希望に合う大学、すなわち教員養成を積極的に行っている一定規模の大学を選ぶことが優先事項となった。実は、専修大学との国際交流協定校であるオレゴン大学はこうした条件を十分に満たす非常にハイレベルな大学であった。しかし、恥ずかしながら筆者は当時、サンフランシスコやポートランドなどの米国西海岸の著名な大都市に所在する大学を中心に検討していたため、ユージーンというあまり聞き馴染みのない中規模の都市にあるオレゴン大学について十分に検討することがなかった。大変運の良いことに、専修大学国際交流事務課にオレゴン大学に長期間留学されていた職員の方がおり、その方からオレゴン大学やユージーン市の様子について詳しい話を聞くことができた。このことが、筆者がオレゴン大学を留学先に選定する大きなきっかけとなった。今から思い返しても、これは筆者だけでなく家族にとっても非常に良い選択であったといえる。貴重なきっかけをくださっただけでなく、オレゴン大学の留学生受け入れ窓口の紹介までしていただいたこの職員の方には感謝するばかりである。

2. 受け入れ機関の決定プロセス

オレゴン大学に在外研究の受け入れ依頼をすることに決め、具体的な依頼手続きを開始したのが2018年4月頃であった。専修大学研究員の手引きには、研究機関からの招聘状を取得し、在外研究を4月から開始する場合には前年11月末までを目安に提出することが求められている。これに間に合わせるために、約1年前から準備を始めたことになる。

まず、国際交流事務課の方に紹介してもらったオレゴン大学のスタッフにメールを送ることから始めた。そこから複数のスタッフを次々と紹介してもらい続け、6人目でついに私の受け入れ教授となるChris Murray教授にたどり着くことができた。Murray教授に受け入れを快諾していただき、オレゴン大学からの招聘状は2018年6月頃に取得することができた。ここまでに要したのは約2か月であったが、筆者はMurray教授をはじめ他のスタッフの方々と頻繁に30回ほどのメールのやり取りを行った。招聘状取得に関する手続きのほとんどはメールで行われ、筆者が電話をしたのは一度だけだったように記憶している。こうしたところからも、インターネットを最

大限活用してメールでのやり取り等で（「招聘状取得」という筆者にとっては特に）重要な事項もスピーディーに決定していくアメリカのスタイルを体感できたように思う。

筆者が想定していたよりも短時間で招聘状を取得することはできたのだが、次いで重要なビザ取得書類の発行までにかかった時間の長さも、筆者の想定を上回るものだった。結論から述べれば、ビザ取得に必要な書類が最終的に揃ったのは2019年1月中旬だった。招聘状を取得できた際には、これほど早く準備を開始しなくても良かったのではないかと油断していた筆者だったが、ビザ書類が揃わないままに年を越してしまった時には数時間おきにメールをチェックして、かなり肝を冷やしたことを覚えている。これには、先ほどとは別のアメリカのスタイルが関係していた。すなわち、休日はしっかりと取り、時間外に業務を持ち越すことはしないという働き方である。ほとんどの職員は大学の休業期間には（当然ながら）出勤はしない。さらに、筆者の書類を担当していた職員が休暇を取るタイミングも年末に重なっていたために、（筆者にとっては長期間に感じられた）メールのやり取りが滞ったというわけだった。子どもが通った地元の公立小学校でも15:00以降は学校に電話しても教職員は応答せず、業務時間内かけ直すよう自動音声が出る。日本では教育の仕事はオンとオフの境界線が曖昧であるといわれがちだが、米国では教育機関においてもオンとオフがはっきりとした働き方が一般的であった。

筆者がスリリングな経験をしたからというわけではなく、必要書類の提出など若干複雑な手続きが必要となるので、ビザ申請に必要な書類について少し付け加えたい。米国に長期滞在するためにはJ-1ビザ取得が必要である。また、筆者の場合には同行した家族のためにJ-2ビザを取得する必要がある。ビザ取得の申請手続きは筆者本人が日本のアメリカ大使館において行うのだが、この申請に必要な書類の発行を受け入れ先の研究機関に依頼する必要がある。ここでは、先に述べた研究機関からの招聘状の発行とは別に、履歴書、研究計画書、英語力証明書や財政証明書等の書類の提出が求められる。筆者の場合には、これらの書類をもとにオレゴン大学から必要書類が発行されるのに要した期間が約6か月だったわけである。

3. 出発前

今から思えば、今回の在外研究全体を通しての最大の反省は、日本を出発する3週間前まで住居が決められなかったことであろう。住居が決まらなければ住所も得られず、家族で出国する筆者にとっては、様々な書類に新住所を記入することができな

ったり、事前に荷物を送ることもできなかつたりと、非常に苦労した。結果的に、当面の生活に必要な物を詰めた大きな段ボール7箱(荷物預け入れの超過料金も支払って)を筆者自身の手で運んで米国行き国際線に乗り込むことになった。さらに、あろうことか、シアトル乗り継ぎの際には預けた荷物を全て引き取り、自分の手でユージーン行きの国内線カウンターまで移動させなければならなかった。ここでもまた、空港内で段ボールを過積載した2つのカートを巧みに？ 全速力で走らせる筆者の姿が見られたのである。

このことによって家族にかけた心配と苦労は計り知れず、渡米後にも事あるごとにこの時の大変さについて触れられ、やんわりと(時には直接的に)揶揄されるようになってしまった。住居問題は、米国滞在中の筆者の家庭内での立ち位置、パワーバランスを決定させてしまった事案だったといえる。こうした冗談はさておき、筆者のように滞在先についての予備知識や土地勘がない者にとっての住居選びは難題かつ重要である。日本でアパート等の賃貸契約を結ぶ際にも、居住する地域や物件の詳しい情報が欲しいし、部屋の空き状況などのタイミングも大きく影響する。オレゴン大学職員の方からのアドバイスやインターネット情報をもとに2019年1月頃から住居探しを開始したものの、6月が学年末である米国の大学街において4月から家族と共に生活を開始する筆者の条件に合うアパート等はなかった。また、大学が紹介できるゲストハウス等も全て埋まってしまっていた。実はこのまま、3月に入るまで住居未定の状態が続くことになり、ホテル住まいでも何とかなるだろうという根拠のない危うい自信があった筆者以外の家族全員に大きな不安とストレスを与えてしまうことになった。このように、出発前から不安のどん底にあった我々を救ってくれたのは、オレゴン大学国際交流課(International Student and Scholar Services)が提供するホストファミリー紹介制度であった。紹介されてからメールで若干のやり取りをした後、4歳と1歳の子どもを連れて日本人家族をまるごと受け入れてくれたのは、ユージーン在住の元オレゴン大学職員のDouglas氏であった。ようやく筆者は、現地に入ってから住居やその他の生活基盤を整えるまでの間に家族で過ごすことのできる場所を得ることができたのだ。ただただ幸運だったとしか言いようがないが、ここで知り合ったDouglas氏とはその後も家族のような関係が続き、我々のユージーン生活を大変有意義なものにしてくれた。彼と出会うことができた幸運に感謝するとともに、今振り返ればホテル住まいではどうにもなっていなかったことが明らかなので、当時の自分自身には特大のお灸をすえておきたいと思う。

このように、現地の大学が留学生だけでなく在外研究員の家族に対してもホストファミリー等を紹介してくれる場合もある。今回は幸運が重なってうまくいった稀なケースかも知れないが、大学のゲストハウスや寮、大学周辺の家やアパート等に空きがない場合には一考の価値があるのではないか。

4. 到着直後

出発直前だけでなく、出発当日も大荷物を抱えてバタバタしてきたが、何とか家族で無事にユージーンに到着することができた。そして、基本的な生活環境が整うまでの間、ホストファミリーの家で過ごさせてもらうことができた。筆者の場合は、幸いにもホストファミリーとその家族や友人たちが快く支援してくれたおかげで、2～3週間の間に以下のような生活基盤を整えることができた。それらは大学への届け出、大学での研究者オリエンテーション、銀行口座の開設、携帯電話の契約、インターネット環境の整備、住居の契約、家具や日用品の整備、洗濯乾燥機のレンタル契約、ケーブルTV会社との契約、車の購入、運転免許証の申請などである。これらを全てこなすには日本でもかなりの時間と労力が必要だが、多くの方々の手厚い支援のおかげで短期間のうちに済ませることができた。例えばDouglas氏は、バス移動では不便だからと、会って間もない筆者に車を貸してくれたりもした。このように、筆者は到着早々から1年間ずっと多くの方々に支えられてきた。感謝してもしきれない。

筆者は4歳と1歳の子どもを連れて渡米したので、子どもの保育所を探すことが必要だった。これが予想していたよりも大変であり、到着後最大のミッションとなった。ユージーンに限らず、一般的に米国では保育所の費用は日本に比べて高額である。これは、保育料についての公的な補助がなく、原則的に費用は全額自己負担となるからである。オレゴン大学には、キャンパス内に大学と連携して運営されている保育所が2か所ある。それぞれ訪問して確認したところ、どちらも保育料は月額1,400ドル程度ということであった。当時は1ドル110円ほどで、月額154,000円の保育料を支払うことは大変難しく、断念せざるをえなかった。キャンパスに近い保育所はどこも相応に高額な保育料が必要であったため、対象範囲を徐々に広げて検討を続け、結果的には教会が運営する保育所を選択した。ここはキャンパス近くの自宅から15キロほど離れており、フリーウェイを使って車で約15分の立地であったが、教会の敷地内でのアットホームな雰囲気の保育環境が魅力的で、保育料も月額922ドルであった。ここには5月から7月まで4歳の子どもを預けた。この子どもが5歳になり9月から地元

の公立小学校（幼稚園）に通い始めたのを機に、9月から翌年2月までは、代わりに下の1歳の子どもを預けることができた。最終的にはアットホームで良質な保育所に巡り合うことができたが、ここにたどり着くまでには多くの保育所を訪問したり、電話やメールでやり取りを重ねたりと苦労も多かった。コンタクトを取った保育所は10か所以上にのぼった。しかし、日本ではこれほど多くの保育所を訪問したりすることはなく学ぶことも多かったため、大変貴重な経験ができたと考えている。

II. オレゴン大学における教育

1. 主体的で対話的な授業構成

多くの先生方のご厚意により、筆者はオレゴン大学教育学部（College of Education）の授業を聴講する機会をいただいた。学部生を対象とするものから、修士課程、博士課程の大学院生を対象とするものまで非常に多くの授業に参加することができた。もちろん、それぞれの授業には専門性に基づいた独自の魅力があったが、これらの授業全体に共通する特長として印象に残っているのは、本質的な問いを大切にしながら主体的で対話的な授業の進め方である。授業の規模やレベルに関わらず、毎回の授業には必



グループでの議論を中心に進められるオレゴン大学の授業風景

ず授業内容に関連する本質的な問いが設定されている。授業は、学生と対話をしながらこれらの問いに対する考察を深め回答を見つけていくという流れで構成される。小学校や中学校における授業構成においても、児童生徒の学習意欲を引き出して深い考察を促進するきっかけとなる問いが重要であることは周知である。このような授業構成の基本を決して疎かにせず、毎回の授業で学生の主体的で対話的な学びを実現させている点で、オレゴン大学の教育レベルの高さを体感することができた。

2. 活発な授業を支える大学院生

オレゴン大学教育学部の授業では、大学院生がティーチングアシスタント (TA) としてだけでなく、学部生に対して実際に授業を行う光景が当たり前に見られる。これは大学院生が大学によって授業者 (Instructor) として採用されるシステム (Graduate Employee: GE) である。GE は、Instructor や Researcher として大学の授業や研究に携わることでキャリアを積むだけでなく、給与を得たり学費免除や保険料減免等を受益する。大人数の学部生が受講する授業においては、週に2日程度実施される通常の授業を補うための少人数のディスカッション授業が週に1時間設定されることが多い。GE は通常の授業にはTAとして参加しつつ、少人数のディスカッション授業を単独で担当する。ここでは、通常の授業の中で提示された授業内容に関する本質的な問いを深める議論が行われたり、課題の作成やプレゼンテーションが行われる。GE はTAよりも本格的な教育活動を行い、成績評価も行うので、大学教育において負う責任も重い。筆者が聴講した中にも100人以上の学部生が受講していた講義型の授業があったが、GEが行う授業において十分な補習が行われていたため、毎回の授業は多くの学生を巻き込んだ議論が常に見られる白熱したものであった。このような仕組みが、学生の積極的な参加を継続的に引き出して、質の高い大学教育を維持することに貢献しているのではないだろうか。

おわりに

オレゴン州ユージーンでの生活は、自然と人々との出会いに大変恵まれたものだった。筆者は余暇に様々な事にチャレンジする機会にも恵まれた。例えば、地元の学校の教職員の友人たちとオレゴン州立刑務所を何度か訪れ、受刑者の方々とサッカーをする経験もすることができた。思えば、出発前から予想外のできごとが続いたり、そ

れなりに苦労もあったが、多くの人々の優しさや思いやりに支えられて充実した一年間を過ごすことができた。



オレゴン州立刑務所におけるレクリエーション活動としてサッカーに参加

最後に、帰国についてであるが、筆者が在外研究から戻る予定であった2020年3月は、米国において新型コロナウイルス感染症が爆発的に広がっている最中であった。この影響で、2月下旬から3月下旬までの1か月間は筆者も米国の自宅にひきこもらざるを得なかった。帰国の際にも非常に多くの方々に助けてもらい、度重なる航空機の渡航キャンセルの荒波をかいくぐって3月下旬に無事に日本に帰国することができた。それからの14日間は、筆者と家族の米国滞在を支えてくれて、温かい支援をしてくださった全ての方々に対する心からの感謝をゆっくりと噛みしめながら自主隔離期間を過ごした。今思い返せば、色々とやり残したことも多かったかもしれないが、まずは無事に在外研究期間を終えることができたことに感謝したい。

本来ならば在外研究期間中の活動について詳しく述べるべきだったが、オレゴン大学での留学を無事に開始するまでの筆者のドタバタ劇についての記述が大半を占めてしまった。失敗談が多く、参考となる部分は少なかったかもしれないが、これから在外研究に出発される方々が筆者と同じ轍を踏まぬように気をつけてくれるきっかけとなれば幸いである。

最後に、今回の在外研究の機会を与えてくださった専修大学と法学部の先生方、在外研究期間中に米国において、そして日本から多大なご支援をいただいた皆様に心からの感謝を申し上げたい。